

中期語学留学プログラムの英語学力への効果に関する研究

—日本の大学英語教育への提言—

藤澤良行
小森道彦

1 中期語学留学プログラムに関して

最近では中学、高校でも短期語学留学のプログラムが充実し、春休みや夏休みを利用した、いわゆる「ホームステイ・プログラム」も多数実施されている。それを踏まえて、大学では、短期プログラムはもちろんのこと、3～4ヶ月外国に滞在するタイプの、いわゆる中期語学留学プログラム（以下中期留学とする）を設定し始めてきた。このタイプのプログラムの利点は、留学先で修得した単位が在籍する日本の大学の単位に算入されるので、履修期間内に留学による空白ができたとしても、他の在學生と共に所定の年限で卒業が可能な点である。

約1ヶ月間外国に滞在する短期型の語学研修では、語学的な運用能力を身につけることも目標の一つに掲げられるが、実際には短期間だけに語学力の飛躍的な伸長を望むのは難しいと考えられているし、それが了解されてもいる。むしろ滞在期間中に遭遇するさまざまな出来事や現地の人との出会いを通して、いわゆる「異文化理解」を深める体験が得られる貴重な場であることが最大の意義であると捉えられている。

これに対して、中期留学になると少し見方が違ってくるように思われる。中期留学は、見学や観光など視察的要素の強い短期研修の延長として、期間が長い分だけより深い異文化理解が可能になることに意義を見いだすこともできるだろう（塩沢（編）1996）。しかしむしろこのプログラムのポイントは、語学の数ヶ月にわたる継続的トレーニングが可能になることにある。つまり短期留学とは逆に、語学力伸長の目的が「主」で異文化体験は「従」と捉えることができる。

一般的に、国内で学ぶよりもその言語の使われる現地に行く方が語学力が身につくと考えられている。海外留学の効用についてのこの一般的な思いこみに関して、Freed（1995）は海外留学によって目標となる第二言語の使われている環境に浸ることで、教室内だけでは得られない効果があることが暗黙の了解事項として存在することを以下の様に指摘する。

It has long been assumed that this combination of immersion in the native speech community, integrated with formal classroom learning, creates the best environment for learning a second language. The strength of this assumption is so powerful that there has evolved a popular belief, one shared by students and teachers, parents and administrators, that students who go abroad are those who will ultimately become the most proficient in the use of their language of specialization. (Freed (1995: 5))

しかし、留学によってどのような語学力が身に付くのかを、日本の大学生を対象にして検証した研究はあまり行われていないのが現状ではないだろうか。上に述べた短・中期の語学研修についても、その効果についてのまとまった分析は Kawachi (2000)、野中 (他) (2001, 2002) などを除いて極めて少ない。留学すれば自然に語学力が身につくといわれるが、果たしてどこまで本当なのか。ひるがえって言えば、日本で学ぶ英語教育は役に立たないのだろうか。まさにその疑問が日本で設置されている英語関連学科 (英文科の名前はもはや希少価値となり、英語 / 言語 / 国際 / 情報 / コミュニケーション学科や実践英語学科など「使える英語」を目指して名付けられたものを含む) の存続意義が問われている部分なのである。

本研究では、以上のような危機感を踏まえて、中期語学留学 (4 ヶ月) を経験した学生の英語学力と、同じ時期に日本で勉強した他の学生の英語学力の伸長を、検定試験の結果を通して比較検討するものであり、その結果に基づいて日本の大学英語教育に不足している点を指摘し、今後の進むべき方向を示すものである。

2 留学プログラムの概要

今回の調査対象とするのは以下に述べる中期プログラムである。期間は8月下旬から12月中旬までの4ヶ月で、日本からの留学者は期間中ケント州立大学 (Kent State University, 米国オハイオ州) のESLクラスに所属する。到着して最初のクラスで placement test を受け、各レベルにクラス分けをされる。調査対象とする11名 (すべて2回生) に関しては、level 6 ~ level 2 (level 6が1人、level 5が5人、level 4が3人、level 2が2人) に分かれた¹。1クラスの定員は10名以下に制限されている。

授業は次のように Core Class と Elective Class に分かれている。レベルによって少しずつ授業科目の内容が異なるが、学生は平均して6~7科目の英語の授業を選択して受講する。

● Core Class

「Vocabulary/Speaking」 「Reading, Thinking, Speaking」 「Writing」

● Elective Class

「Pronunciation」 「Listening」 「TOEFL Preparation」 「Grammar」 「American Literature」
「American Culture」 「Business English」

一つの科目では一コマ50分授業が週3~7回行なわれる (75分授業が週2回の科目もある)。月曜、水曜、金曜と週に3回授業がある場合もあるし、「Vocabulary / Speaking」のように一日に2コマ連続で週3回という科目もある。全体的に言うと、週日は朝9時から午後4時近くまで (昼休みを除いて) 授業があり、クラスルームで英語漬けの状態がずっと続くといってよい。そして、この週単位の時間割が約4ヶ月続くことになる (途中で秋休みの休暇が1週間ある)。授業時間数だけでも英語に向き合う時間が日本とは雲泥の差がある。そしてそれぞれの科目で自宅課題が出ることでさらに差が大きくなる。

また、滞在生活は寮に入るスタイルで、希望する寮によるが大部分の学生は二人部屋に入る。同居者は同じ留学生（日本人の場合も含む）の場合もあれば、現地学生と同室になることもある。一人で部屋を使用することもあるが、希望すれば同居者を見つけてもらえる。このように授業外でも英語を使わなくてはならない場面も多く、まさに英語に浸る状態になる。

3 対象学生

2002年度入学の四年制私立女子大学の英米文学科2回生69名（試験当日の欠席者等を除く）が調査の対象で、先に述べたようにこのうち11名が、2003年度秋学期にケント州立大学での4ヶ月の中期留学プログラムに参加した。

4 調査時期

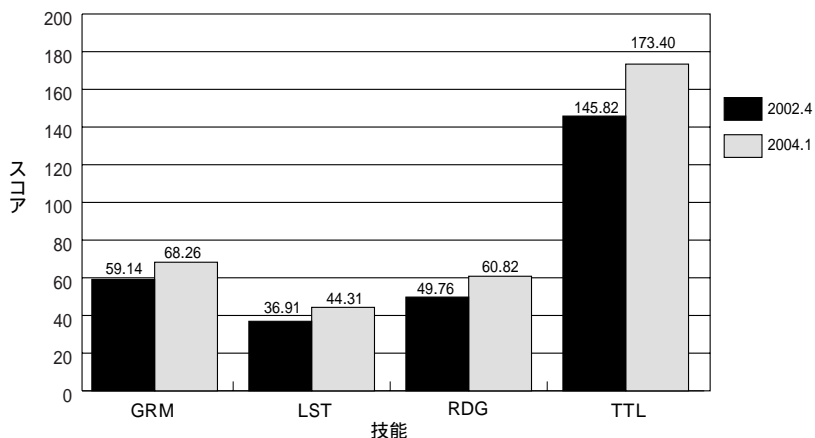
2002年度入学生の入学時（2002年4月）と2回生終了時（2004年1月）に、同一内容のG-TELP（level 3）を実施した²。中期留学者も帰国後に同時に同じテストを受験している。

5 G-TELPのテスト結果

5-1 全体の結果

2回のテスト結果をまとめると表1になる。二つのテストについて、平均値の差を有意水準5%で両側検定のt検定により検討した。その結果 $t(68) = 7.84$ 、 $p = 4.27$ であり、これらの平均値の差は有意であった。（2回目の試験の実施までには約2年間あるので、初回の試験による学習効果は無視できると考える。）図1のgrammar（GRM）、listening（LST）、reading（RDG）の技能別に見ても合計得点（TTL）で見ても、2年間の英語学習の結果全体的として学力が伸長したことがわかる。

図1 テスト結果（全体）



5-2 ケント留学生とケント留学生以外の学生との比較

2回のテスト結果を「ケント留学生」と「ケント留学生以外の学生」の2つのグループに分けてまとめると表1になる（以後、ケント留学生を「Aグループ」、ケント留学生以外の学生を「Bグループ」と呼ぶ）。

表1-a 1回目（2002.4.）のテスト結果

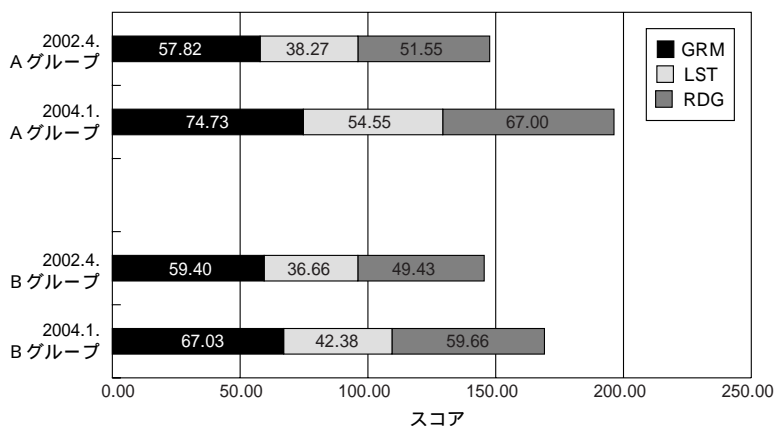
	ケント留学生（入学時）				ケント留学生以外の学生（入学時）			
	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL
平均	57.82	38.27	51.55	147.64	59.40	36.66	49.43	145.48
中央値	59	38	50	144	59	33	50	148
標準偏差	15.3285	9.5299	13.6262	23.3935	14.4889	11.0431	13.8768	30.0842
最小	23	25	33	117	27	17	12	95
最大	77	54	75	189	86	67	88	223
標本数	11	11	11	11	58	58	58	58

表1-b 2回目（2004.1.）のテスト結果

	ケント留学生（入学時）				ケント留学生以外の学生（入学時）			
	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL
平均	74.73	54.55	67.00	196.27	67.03	42.38	59.66	169.07
中央値	77	54	67	198	68	42	62	171.5
標準偏差	15.69771	11.63068	9.82853	30.89366	14.92433	10.54119	14.99070	28.98085
最小	50	33	54	154	27	21	21	86
最大	100	71	88	242	91	62	88	216
標本数	11	11	11	11	58	58	58	58

入学時のテスト結果（表1-a）から中期留学生の入学当初の英語力の特徴をつかむことができる。Aグループの平均点（TTL147.64）がBグループの平均点（TTL145.48）とほとんど変わらないことから、最初の段階ではAグループはそれほど高学力ではなかったといえる。それに対して、表1-bからわかる通り、2回目のテストのAグループの平均点（TTL196.27）とBグループの平均点（TTL169.07）の差が大きくなっていることに注目しておきたい。これらをグラフで表せば図2になる。

図2 ケント学生とそれ以外の学生のグループ別平均点



技能別に伸び率を算出して見ると A グループは各技能、総合点とも 30%～40%の伸び率を示し、とくに listening における伸びが 42.52%と最も著しいことがわかる（表 2）。これに対し B グループは各技能、総合点とも 10～20%の伸びしか示していない。このあたりが直接の留学の効果といえるものかもしれない。

表 2 グループ・技能別の伸び率

	GRM (%)	LST (%)	RDG (%)	TTL (%)
A グループの伸び率	29.25	42.52	29.98	32.94
B グループの伸び率	12.86	15.62	20.68	16.21

5-3 考察

調査対象者全体で考えてみると、図 1 からわかるように、全体的に入学当初の時点から 2 回生終わりにかけて、全体の平均点 (TTL) が上昇したことを考えれば、この 2 年間の日本での英語教育の効果がある程度出ている。(このことは 2001 年入学者に対する学力調査での数値の推移を考察した小森・藤澤 (2004) で述べたこととほぼ一致する。)

さらに A グループではその伸びが顕著に現れている (図 2、表 2)。それはやはり中期留学によるものと考えられる。留学先で listening に特化した授業はほとんどないにもかかわらず、この中でとくに伸びが著しいのは listening 技能である。多量の時間をかけて英語の授業を集中して受けたこと、また 4 ヶ月間英語を日常的に使う環境にいたことによる効果が認められる。³

6 中期留学者の中での伸びの比較

前節では中期留学経験者とそれ以外の学生の伸びを比較したが、中期留学者内部での成績の伸びには何らかの差があるのであろうか。

小森・藤澤 (2004) では、今回の調査対象である学生を入学時に実施した G-TELP の結果にしたがって上位群、中位群、下位群の 3 つのグループに分けて考察を行った。ケント留学者 11 名のうち、上位群に入るものは 4 名、中位群に入る学生は 7 名であり、下位群の者は今回参加しなかった。

上位群と中位群それぞれの学生について、初回の G-TELP と二回目 G-TELP の総合点 (TTL) の平均の差について有意水準 5% で両側検定の t 検定で検討した。その結果、上位群は $t(3) = 6.99$, $p = .006$ 、また中位群は $t(7) = 4.44$, $p = .004$ でいずれも有意であった。彼らの G-TELP のスコアの伸びを群別に一覧にすると次の表 3 のようになる。

表 3 中期留学者の群別での G-TELP の伸び

	GRM (%)	LST (%)	RDG (%)	TTL (%)
上位群 (4 名)	20.02	34.83	27.42	24.83
中位群 (7 名)	45.07	61.04	41.49	39.75

表 3 から明らかなのは、中位群の方が上位群よりも成績の伸びが大きいということである。上

位群が grammar, listening, reading それぞれにおいて平均 20%～30%前後の伸びを示しているのに対し、中位群では grammar, reading に関しては 40%強、listening では 60%もの伸び率を示している。個別に見ると、上位群の学生はどの技能においてもほぼ平均に近い形で順調に成績を伸ばしている (14.2%～36.8%)。中位群では個人によってかなりのばらつきがあるものの、1名を除いて上位群の伸び率より低い者はほとんどいない (9.6%～96.9%)。さらに数名の学生が、例えば listening のスコアが 25 から 67 へ (伸び率 168%)、grammar が 23 から 55 (伸び率 139%) のように、技能によっては入学時の 2 倍をこえる得点をマークしている。

一般的に、中位群の学生は自分の学力に対する自負はあるが、それが十分な学力の伸びに結びつきにくい傾向がある (小森・藤澤 (2004))。しかし相対的に下位群よりも英語力は高いので、中期留学のような環境の中では、自分の英語学習のための環境が整ったという意識とともに学力も伸びるのであろう。国内では上位群ほどには学力が安定せず伸び悩んでいる中位群の学生にとって、中期留学はカンフル剤としては十分に機能することがこの比較からよくわかる。

7 中期留学者の自己分析の変化

中期留学者に対して、2003年12月の帰国直後に記名式の質問紙 (APPENDIX 参照) による調査を行った。ここではその結果を踏まえ、もう少し詳しく中期留学の効果について考察を進めることにする。留学の効果を考える上で、本人の経験や実感を把握することも大切な面を持つ。そこには学力テストのスコアの量的な面での考察だけでは捉えられないものが含まれるからである。

以下は四技能、および留学後の英語運用の自信に関して、留学前と比べて自己分析してください (質問紙 3-4、3-5) という設問に対する自由記述による回答である。まず学力面の listening, speaking, writing についての学生の自己分析を見てみよう (カッコ内は回答者が留学先で所属したクラスのレベルを表す)。

■ listening に関して

- ・一番伸びたセッションだと思います。会話することも大事ですが、TVなどを見て会話の全体の雰囲気を見ることも大切だと思いました。(level 5)
- ・何となく感じで聞き取れるようになった。(level 4)
- ・リスニングが一番上達したと思います。(level 2)
- ・前とは比べものにならないくらい伸びた。TOEFL のリスニングセッションでいうと、二人の間の短い会話はすーっと入ってくるようになった (問題にもよるが)。リスニングはたえず耳から入ってくるからだから、嫌でも身に付くと思う。ただ字幕無し映画レベルはまだまだである。(level 5)

■ speaking に関して

- ・しゃべろうという気持ちが持てるようになりました。(level 5)
- ・一番伸びるのが難しいと思いました。前よりは伸びたと思いますがもっと長く滞在するこ

とが必要だと思います。(level 5)

- 何とか伝えようとするようになった。(level 4)
- たくさん間違えはしますが、何とか使おうとする努力が出来るようになりました。(level 2)
- 私の思ったことや考えを話すのを相手は待ってくれているので、がんばって伝えようとした。(level 4)
- 3ヶ月目まで言いたいことがスラスラと出てこなくて、つまりつまりで話していたが、このままではヤバイと思い積極的に話しかけていくと少しずつ向上していったように思う。(level 5)

■ writing に関して

- 「難しい言い回しではなく簡単な言い回しや違う言い回しを考えろ」と先生がいつも言っていて、あまり難しい単語は使わないけれど、けっこうスイスイ文が書けるようになった。(level 4)
- とにかく練習量が多いので、たくさん書けば書くほど伸びると思いました。(level 5)
- 簡単な英語でも続けて書けるようになった。(level 4)
- 行く前より英文を書くということが出来るようになりました。(level 2)
- ライティングの授業でたくさんのエッセイを書いたので少しは書き方がわかったと思います。(level 6)
- 前よりも書けるようになっている。単語力はそれほどないが、構文などを使うと書きやすい。英語で日記を書けばよかったと思う(他のクラスの宿題でもあった)。(level 5)
- 簡単な単語ばかりだけど、英文を書くことが好きになった気がします。(level 4)

留学者の自己分析についての回答を見ると、やはり listening の面での伸びについての自覚が著しい。その結果はそのまま G-TELP での平均点の伸びに反映した。また多量に英文を書いた経験が writing の自信につながっていることもわかる。そして同じ発信技能である speaking に関しては、何とか自己を表現しようという態度が身に付いたことを実感しており、話そうとする態度においての自己変化を感じ取っているようである。

さて上の三技能に対して、reading の回答はどうだろうか。

■ reading に関して

- ある程度は伸びたと思います。(level 5)
- TOEFL の授業により決められた時間の中でどれだけ早く内容をつかむコツをつかめたと思います。(level 5)
- 前まで英語の本を読むのがいやだったが、続けて読めるようになった。(level 4)
- 単語の量がまだ少ないので、特に伸びたとは思いません。(level 6)

- ・自分のわからない単語が出てきても自分なりに予想する力が上がったと思う。(level 4)
- ・あんまり上達したとは思えない。英語で書いてある本を毎日少しでも読書すべきだった。(level 5)
- ・リーディングに関してはそんなに多くの本を読んだわけではないけど、多少はアップしたように思う。型にはまった訳し方をしなくなった。(level 4)

他の三技能の伸びた実感に対して、reading での伸びに対する実感が乏しいことがわかる。これは各レベルの学生に共通しており、reading 面での学力伸長を考える上で重要である。毎週75分のreadingの授業を2回、TOEFL クラスを50分2コマで週2回という集中的なクラスを4ヶ月に渡って受講しても、reading が伸びたという実感をまだ持てないことになる。

では、全体的な自信についてはどうか。「3-5 英語を使う上での自信という点で研修後はどうなったと思いますか」という項目に対する回答は次の通りである。

- ・とても自信ができました。(level 5)
- ・自信满满というわけではないが、少なくとも前よりはあるつもりだし、そうでないと困る。自信がなくても相手に伝えたいという気持ちや意欲があれば、コミュニケーションはとれるのだ。(level 5)
- ・以前よりも自信が持てたと思う。(level 4)
- ・ちょっと自信がついた。(level 5)
- ・行く前から英語が全く出来ないとか、全く自信がなかったわけではないので、研修後もそんなに変化はありません。(level 6)
- ・下手でも自分の精一杯の英語で自分の思っていることを相手に伝えたいという積極的な気持ちが向上していると思います。(level 5)
- ・自信は前よりできた (level 2)
- ・(テスト) 結果には出ず少しくやしく思いますが、現地の人や他の留学生と単語やジェスチャーではなく会話のできたので自信が持てました。(level 2)
- ・英語を使うのが楽しくなった。少しくらい間違えても自信を持って会話できるようになったと思う。恥ずかしいと思わなくなった。(level 4)
- ・行く前より上がったと思います。(level 5)
- ・外国人を見ると自分から話しかけるようになった(日本で)。その外国人さんに英語が上手だねと言われて、もっともっと自信がついた。(level 4)

留学者全員について、英語の運用に自信が持てるようになったことが共通して読みとれる。この部分での意義こそが中期留学の体験者にとって最も重要な点であろう。以前に英米文学科入学生に対して入学動機の調査をしたが、この中でもっとも強い入学動機となったのが「英語が話せるようになりたい」というものであった(詳細は藤澤・小森(2001)を参照のこと)。その動機を

この留学でかなりの程度満たすことができたということである。英語の音声、特に発信面に関しては中期留学は十分機能したといえる。

しかし別の角度から見ると、例えば「自信を持って相手に英語で話しかけることができた」という回答が level 2 ～ level 5 の学生に多い。つまり、多くの学生にとって相手とのコミュニケーションの手段、さらに言えば（相手の言うことを正確に理解できることではなく）自分が英語を話しそれが一方的に相手に通じる喜びだけが「自信」となって現れることは、こうした短・中期の語学留学の限界を示しているとも言える。

これに対し、比較的レベルの高い level 5 ～ level 6 の学生の回答を見ると、自分の話す英語が相手に通じることそのものを自信とはとらえていない。多くの学生が「自信」として身につけたものが、英語学習の最初の第一歩にしか過ぎないことを彼らなりに理解しているからだと思われる。

8 結論と展望——中期語学留学の意義と日本の大学英語教育

上の中期留学の効果の考察を踏まえて、日本の大学での英語教育の改善すべき点を考えたい。そして今後の課題にも触れる。

今回の中期留学を経た学生の英語力の伸び、特に中位群の学生の伸びの著しさを考慮すると、中期留学に意義があることは明らかなように思われる。先に述べたように、reading 技能の伸びはあまり期待できず、発信面のわずかな自信をつけるだけに終わってしまう限界はあるものの、海外で数ヶ月間英語で生活しながら英語に集中的に触れることで、英語の運用力が特に音声面で伸長し、テストスコアでも好結果が出ている。

しかし英語は留学に頼らないと身につかないのだろうか。留学なしでは学力を伸ばすことはできないのだろうか。

5-1 で述べたとおり、日本で勉強を続けた学生も G-TELP の点数を伸ばしていることは確かである。このデータは、本調査の一年前に実施した 2001 年度入学生に対する調査（小森・藤澤（2004））の結果とも一致するものであり、二年続けてほぼ同じ程度の伸びを示している。このことは国内で大学のカリキュラムを実践していくことでも英語学力の伸長が望めることを示すものである。

もちろん音声面の学力の伸びの著しさを考えると中期留学にも優れた部分があるが、これは留学でしか得られないものではない。この部分を日本で行われているカリキュラムに取り入れて改善すれば、日本でも留学するのと同じ期間でより効果を上げることが可能であると思われる。ではそのためには何が必要なのか。

まず第一点として、英語の学習時間数を大幅に増やす必要があることが挙げられる。先に述べたとおり、中期留学がある程度成果を上げ、留学生たちが各自の英語力の伸びを感じ取っているのは、英語の使われている環境に浸って勉強を続けたところに帰する所が多い。留学生が受講した一週間の時間割から英語学習に費やした時間を概算すると、授業時間だけで毎日約 6 時間の集中トレーニングをしたことになる。このトレーニングを 4 ヶ月間続けた学習量を考えると、日本

のカリキュラムでの英語学習時間とは雲泥の差が出てしまう。しかも1クラス10名に満たないクラスサイズである。この量と環境の差をどう埋めるかが日本での大きな課題である。⁴

第二に、四技能の中では reading の強化が必要である。G-TELP の得点の伸びでいえば他の技能にくらべて遜色はないが、7章での質問紙への回答にあったように、reading 面での伸びの自覚があまり得られていない。留学中にかなりの時間をかけて reading の練習をしたはずなのに伸びた実感がないことは、読みの理解の根本的な部分の問題である。この部分を改善しなければ reading の伸びを実感することは難しい。そしてこれこそが日本での英語教育が意味を持つ部分なのである。

先に時間数の不足を指摘したが、これは、単に時間数を増やすだけでは解決しない問題でもあるように思われる。最近の学生の全般的な傾向として、学生の多くが「読めなくてもいいが、話したい」という強い願望を持つ（藤澤・小森（2001））ことから、reading 面を軽視する傾向も見られる。自ら進んで読もうとしないというべきかもしれない。そもそも、英語の reading に限らず、母語である日本語においても読みの弱さがあることもよく知られた事実である。reading の重要性を強調していかに動機づけていくかが課題となろう。

第三に、学生の意欲をどう高めるか。留学者は「留学」という特別な環境に身を置いていたからこそ意欲的に学習に取り組めたと見ることもできる。それが留学の効果なのであろうが、それと変わらぬ意欲で取り組めば、日本においても英語学力を伸ばすことは可能なはずである。そのためには、学生だけではなく、教授者、教授内容、教授方法、学習環境など英語学習を取り巻くすべての要因をその目的に十分かなった方向付けをして提供する必要がある。

今後の研究課題としては、中期留学を終えて帰国した学生がその留学経験を活かしてその後いかに英語に取り組んでいるかに関して調査したいと考えている。英語の教育体制として、留学したから終わりではなく、その意欲を保持し、そこで得た経験を元にさらに英語学力を伸ばせるプログラムを提供できているかどうかを考え、中期留学が大学の英語カリキュラム全体の中でどのように位置づけられるのかを再検討する必要がある。

APPENDIX アンケート（ケント帰国生用） 2003年

お帰りなさい。ご無事で何より。ケントでの学生生活についてのアンケートにお答え下さい。なお、3ヶ月研修の成果と今後の検討に関する論文を執筆する上で、この結果を部分的に公表することになることをあらかじめご承知・ご了解下さい（もちろん個人が特定できるような形にはしません）。できるだけ本音が知りたいので、たっぷりと書いていただくことをお願いします。藤澤

0 あなた自身のデータ

0-1 名前：

0-2 学籍番号：

1 ケントでの英語学習について

1-1 クラス分けのレベルはだいたいどのくらいのレベルでしたか

1-2 指定のレベルはあなたに合っていましたか（変更や入れ替えはありましたか）

1-3 一週間の時間割を簡単に教えて下さい

1-4 もっとも印象に残った（身についたと思われる）クラスの内容を教えてください

1-5 自主課題（宿題）はどのようなものが出ましたか、十分こなせましたか

1-6 授業関連以外の英語学習の取り組みはありましたか

1-7 最終の TOEFL の成績を教えてください

listening： 点、 structure： 点、reading： 点、総合： 点

1-8 日本のクラスとどこが違うと思いましたか

2 ケントでの生活について

2-1 大学の施設に関して思うところをどうぞ

2-2 寮に関して思うところをどうぞ

2-3 食事に関して思うところをどうぞ

2-4 ルームメイトに関して思うところをどうぞ

2-5 他の留学生と友達になりましたか（日本人を含む）

2-6 現地の学生と友達になりましたか

2-7 最も楽しかったイベントは何ですか

2-8 空き（自由）時間の過ごし方について

3 中期留学の成果に関して

3-1 行く前に最も不安だったことはなんですか

3-2 3-1 関連：それは解消されましたか

3-3 このプログラムでのあなたの発見は何でしたか

3-4 英語学力の伸長に関してはどう考えていますか（行く前と比較して、技能別に）

3-4-1 reading に関して思うところをどうぞ

3-4-2 listening に関して思うところをどうぞ

3-4-3 writing に関して思うところをどうぞ

3-4-4 speaking 面に関して思うところをどうぞ

3-5 英語を使う上での自信という点では研修後はどうなったと思いますか

4 アメリカ発見に関して

4-1 アメリカでなにを発見しましたか（日本との違い）

4-2 アメリカの大学生との違いをどう思いますか

4-3 多くの人がアメリカ留学に惹かれる理由は何だと思えますか

4-4 ケント大学以外になにを見てきましたか（観光なども含む）

5 今後に関して

5-1 ケントでやり残したことと言えば何でしょうか

5-2 この経験をどのように生かしていきたいですか

5-3 このプログラムで改善してほしいポイントは何か

5-4 事前トレーニングとして必要なことは何だと思えますか（経験からどうぞ）

[注]

- 1 なお、ケント州立大学のESLクラスの多くは、「high-beginning」「low-intermediate」「mid-intermediate」「high-intermediate」「advanced」の5段階でクラス分けされている。
- 2 G-TELPはGeneral Tests of English Language Proficiencyの略。試験はLevel 1～Level 4まであり、本調査で用いたLevel 3(Basic English in Normal Communication)はgrammar(22問), listening(24問), Reading & Vocabulary(24問)で構成され70分で解答する。(G-TELP日本事務局: <http://www.g-telp.jp/>)
- 3 この留学の効果を裏付けるために、参考としてAグループが受けたTOEFL-ITPのデータと比較しよう。出発前(8月)のスコアと帰国直前に現地で受けたスコアを比較すると、平均点が390.9点から429.7点へと上昇している(伸び率約10%)。顕著な例としては357点から437点へ、また397点から447点へ(この学生はG-TELPでは伸び率47%を示している)と著しい伸びを示した学生もいる。
- 4 これは別に大学に限るわけではなく、初めて英語を学習する段階からの問題点でもある。現行の学習指導要領で中学では英語の授業時間は週3時間と定められていることが、大きな問題点として存在していることは周知の事実である。また最近でこそ「少人数クラス」制度を取り入れて改善されはじめているが、それでもクラスサイズは20人を切ることは少ない。

references:

- Brown, James Dean. 2001. *Using Surveys in Language Programs*. Cambridge University Press.
- Freed, Barbara F. 1995. *Second Language Aquisition in a Study Abroad Context*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins Publishing Company.
- 藤澤良行・小森道彦. 2001. 「Extensive Reading の理論と実践」『大阪樟蔭女子大学論集』第38号. 67-81.
- 藤澤良行・小森道彦. 2002. 「外国語学習に関する自己分析と動機の研究——学力別観点からの英米文学科新入生の実像」『大阪樟蔭女子大学論集』第39号. 23-35.
- Kawachi, Chieko, Sumiko Nagasawa. 2000. “Developing Second Language Proficiency in a Study Abroad Context.” 『久留米大学外国語教育研究所紀要』第7号. 49-79.
- 清川英男. 1990. 『英語教育研究入門——データに基づく研究の進め方』. 大修館書店.
- 清川英男・濱岡美郎・鈴木純子. 2003. 『英語教師のためのExcel活用法』. 大修館書店.
- 小森道彦・藤澤良行. 2004. 「外国語学習における学力の伸長と自己分析の変化の相関について——学力別観点から」『大阪樟蔭女子大学論集』第41号. 9-17.
- 前田哲朗・山森光陽(編著). 2004. 『英語教師のための教育データ分析入門—授業が変わるテスト・評価・研究』. 大修館書店.
- 森田勝之. 1998. 『国際英検 G-TELP 受験のための公式ガイドブック——レベル1・2級』. 金星堂.

- 中田賀之. 1999. 『言語学習モチベーション——理論と実践』. リーベル出版.
- 野中辰也・田中ゆき子・隈田朗彦. 2001. 「短期語学留学プログラムの効果測定（1）」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第31号. 71-78.
- 野中辰也・田中ゆき子・隈田朗彦. 2002. 「短期語学留学プログラムの効果測定（2）」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第32号. 33-38.
- Oxford, Rebecca L. (ed.). 1999. *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century*. Honolulu, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii Press.
- Seliger, Herbert W. & Elana Shohamy. 1989. *Second Language Research Methods*. Oxford University Press. (邦訳：土屋武久他（訳）. 『外国語リサーチマニュアル』. 大修館書店. 2001.)
- 塩澤 正（編著）. 1996. 『私たちの異文化体験——留学生の見た素顔のアメリカ』. 大修館書店.
- 八島智子. 2004 a. 『第二言語コミュニケーションと異文化適応——国際的対人関係の構築をめざして』. 多賀出版.
- . 2004 b. 『外国語コミュニケーションの情意と動機——研究と教育の視点』. 関西大学出版部.